

中世に蘇ったトロイロス

酒見 紀成

20年前に英語の教員として採用されてからは、古典語を忘れてはいけないと思い、ギリシア語やラテン語からの引用が多いヴァッカーナーゲルの『統語論についての講義』を夏休みにだけ細々と翻訳していた。しかしそれも途絶えてしまった。だから、自分がどのようにギリシア語を勉強したかなど語る資格はないのだが、せつかく機会を与えられたので、気恥ずかしいけれど、懐かしい大学院時代を振り返ってみたい。

私は英文科の出身だったので、言語学科の人たちと異なり、大学院に入ってから古典語やサンスクリットを習った。ギリシア語の教科書は岩波全書の『新約聖書ギリシア語入門』、辞書は岩隈直著『新約ギリシヤ語辞典』のお世話になった（古典ギリシア語の辞書は英語のものしかなく。古川晴風著『ギリシヤ語辞典』が出版されたのは平成元年）。新約聖書のギリシア語から入ったのは正解だったようだ。時代的にはもちろん古典期に近いけれども、言語史的には中間に位置し、古典ギリシア語へも、現代ギリシア語へも行けたからである。コイネー・ギリシア語は古典語よりも荒削りではあるが、それだけ平易になっており、しかも福音書の記事には同じ単語や表現が多く、内容もイエス・キリストの行動と言葉が中心で、比較的好く知られているからである。

岩隈直著『新約ギリシヤ語辞典』についていえば、例えば関係代名詞のところに《先行詞が関係文中に入る事がある》とか、（－接法、目的の意を持つ関係文だから古典なら直法未、－プラス）というように、文法書から引用しながら丁寧に説明してある。さらに、セム語の影響や異本（本文批評）への言及もある。欲を言えば、もう少し用例が欲しかった。何か調べるのならコンコーダンスが必要であろう。

少しギリシア語に慣れてきたので、次にプラトーンの『クリトーン』に挑戦した。もちろん田中秀央先生の日本語訳と註解と語彙のついたテキストを使っ

たが、それでもプラトーンはさすがに難しかった。長い文が多いし、特に γέ, δέ, δή, μέν, οὖν などの不変化小詞のニュアンスが分からなかった。後にクセノポーンの『アナバシス』を読んだが、この方が優しく感じられた（松平千秋先生の日本語訳が筑摩書房から出版されている）。

それから、ホメロスやヘーシオドスなども読んだ。「怒りを歌え、ムーサよ、ペーレウスの子アキレウスの、その呪わしい怒りを…」で『イーリアス』は始まる。韻律は長短短格が六つの dactylic hexameter である。ホメロスのギリシア語には定冠詞がめったに出でこないので、即座に名詞の性・数・格を特定することができなかった。それに、アッティカ方言ではない形態や、古い活用形が使われているので、ホメロス用のレキシコンや文法書が必要であった。もちろんホメロスはヴァッカーナーゲルの『講義』では非常によく引用される。

中世英国の詩人ジェフリー・チョーサーに『トロイルスとクリセイデ』というトロイア戦争に取材した詩があるが、これは中世になって作られた恋物語、直接にはボッカッチョの『恋のとりこ』に依拠しており、『イーリアス』にはその原型さえないと言われる（パンダロスとディオメーデースは出てくるが、トロイロスはすでに戦死している）。アキレウスに殺されたヘクトールの魂は四肢から飛び去り、地下の暗い冥王の館へと降って行くが、『トロイルス』では、やはりアキレウスに殺されたトロイルスの魂は天上へ昇って行く。そして第八天球層の内側に在って、彼は自分の殺された場所を見下ろし、自分の死を嘆く人たちの悲しみを心の中で笑い、全ての心を天に向けず盲目的な快樂を追い求める人間の一切の営みを責める。ここには中世の多くの作品と同様、キリスト教の影響が見られる。

最後に、私が文法書で重宝したのは、クセジュ文庫に入っているシャルル・ギローの『ギリシア文法』（有田潤訳）であった。薄い本であるが、本格的なもので、印欧基語から説き起こしてある。第一章「音韻、アルファベット、発音」では、唇軟口蓋音やソナントの子音のことが、第二章「名詞形態論」では、例えば中性・複数の -α は古い集合名詞の接尾辞であって、複数のそれではないことが（だから主語が中性・複数のとき、動詞は単数になる）、第三章「動詞形態論」では、動詞の語幹はテンスよりもアスペクトに従っていることが、第四章「統語法」では、文の二番目の位置は（ひっこんだ）位置であるから、ここには前接辞がくることなどが明解に説かれている。